

## 若手教員海外研修支援事業概要報告書

|   |  |
|---|--|
| 氏 名   | 法文学部／准教授 太田 純貴                             |
| 研修期間  | 令和元年 5 月 28 日 ～ 令和 2 年 3 月 10 日（鹿児島発～鹿児島着） |
| <b>1. 教育研究機関</b>  |  |
| 国名及び滞在地名： <u>オランダ国</u> <u>ユトレヒト市</u><br>機 関 名： <u>ユトレヒト大学 Institute for Cultural Inquiry</u>  |  |
| <b>2. 研修報告</b>  |  |
| (1) 研修題目 <u>メディア文化と都市の関係についてのメディア論的・視覚文化論的研究</u>  |  |
| (2) 研修の成果 <u>(※地域貢献型で採択された方は、本研修による海外体験や研究成果が、地域産業や地域人材育成へどのように貢献しうるかについてもご記入ください。)</u>   |  |
| <p>本研修は、学際的研究を推進するユトレヒト大学Institute for Cultural Inquiry (ICON) を受入機関に、ナンナ・フェルーフ准教授を受入教員として行われた。本研修の目的は、現代において複雑性を増す都市とメディア文化の関係を、メディア論と視覚文化論の見地から多角的に捉え直すことであった。スクリーンやスクリーン・スタディーズという見地からアプローチを行っているフェルーフ准教授に加えて、映画・映像研究者であるフランク・ケスラー教授（ユトレヒト大学、ICON所長）の協力のもと、本研修を「理論的フレームの習得」「都市の現地調査」「研究者間交流の強化」の三つの側面から遂行した。</p> <p>「理論的フレームの習得」については、フェルーフ准教授が関わるスクリーンや都市をテーマとし世界から研究者・アーティストを招聘するレクチャーシリーズTransmission in Motion、ケスラー教授が関わりユトレヒト大学の客員研究員や大学院生が発表を行うScreen History Seminarなどに参加し、世界各国の映像文化やスクリーンと都市について多様な知見を獲得できた。加えて、フェルーフ准教授のスクリーンと映像作品についての論文と、ケスラー教授のマジックランタンと視覚教育についての論文を翻訳し、国内の学術誌に投稿予定である。また、詳細は控えるが、自身の研究対象である自転車映像文化・スクリーンや都市から検討する観点も確保できたため、申請者の研究に新たな展開が期待できる。</p> <p>「都市の現地調査」については、Impakt（ユトレヒト）、on the nexus of Art and Technology（デルフト）、Sonic Acts（アムステルダム）などスクリーンを含む視聴覚文化や、それと都市の関係を取り上げたイベントに加え、フェルーフ准教授が言及しているロッテルダムの建造物などについて参加・調査を行い「理論的フレームの習得」を下支えした。同時に、都市や文化的イベントにおけるミュージアムの役割を（再）検討する契機を得た。</p> <p>「研究者間交流の強化」については、以上を遂行する過程でユトレヒト大学の研究者を中心に、ユッシ・パリッカ（サウサンプトン大学）などそれ以外の海外研究者とも研究ネットワークを構築し、自身の研究を世界的に発信する土台を構築できた。</p> <p>鹿児島県の歴史を知るための鹿児島市内各所に配置されたのぞきからくり装置、いちき串木野市の「まぐろの館」や明治維新に関連した鹿児島市内でのプロジェクションマッピング、種子島を舞台にARと地域の関係が織り込まれた『ロボティクス・ノーツ』（アニメ・TVゲーム）などを鑑みれば、鹿児島という都市においてもスクリーンという要素はすでに散在している。これらの身近な事例を、本研修で得た知見をもとに担当授業である芸術文化論やポピュラーカルチャー論において言及・解説していくことによって、地域の事象・活動をグローバルな事象やコンテキストと比較・検討していくことが可能になる。また、本研修では副次的に西ヨーロッパのアートの動向について検証する機会も得た。以上を踏まえれば、本研修成果により、鹿児島県の事例や事象を</p> |  |

世界的な文脈で捉えると同時に、その特有性を認識して正確に発信することのできる人材を育成できる。それは、地域振興のために、アート（イベント）やメディア文化を使って地域の文化的・歴史的資源を多角的に活用できる地域人材の育成の一助ともなる。以上は、京都賞の思想・芸術部門の受賞者の功績を正確に把握し、県内外に発信・説明できる地域人材の育成にもつながる。